The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 21世紀アメリカ文学・映画におけるチベット表象 ：『ゼロK』、『2012』と『ザ・クリエイター/創造者』を例に |
| Author(s) | 王, 立珺 |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 5-14 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/102792 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 21 世紀アメリカ文学・映画におけるチベット表象

## ——『ゼロ K』、『2012』と『ザ・クリエイター/創造者』を例に——

王　立 珺

### １．はじめに

米文学巨匠ドン・デリーロ（Don DeLillo）による小説『ゼロ K』（*Zero K* , 2016）は人体冷凍保存を背景にした小説だ。先行研究の着眼点はポストヒューマニズム、バイオポリティクス、実存主義など挙げられるが、この小説におけるチベット巡礼の表象をめぐる議論は希少だ。またチベット巡礼を人体冷凍保存施設コンバージェンス（Convergence）で上映されるアポカリプス映像（洪水と台風、焼身自殺した三人組と戦場の光景）と併置して論じる研究はない（本稿では、現代におけるアポカリプスを「災害」「惨事」と再定義する）。しかし、この 2 つの表象を併置すると、チベットは平和で世界は混乱としているという対照的な描写が明らかになる。他方、これに類似した描き方を取り入れる同時代のアメリカ芸術作品は『ゼロ K』だけでなく、他にも 2 本のアポカリプス映画：監督ローランド・エメリッヒ（Roland Emmerich）による『2012』 (2009) と監督ギャレス・ジェームズ・エドワーズ（Gareth James Edwards）による『ザ・クリエイター/創造者』（*The Creator*, 2023）がある。そこで本稿では、これらの 21 世紀のアメリカン・アポカリプスにおけるチベットとアポカリプスの繋がりを考察する。

そこで20 世紀の英米におけるチベット像の特徴を振り返る必要がある。20 世紀において、チベットは「戦争と無縁のユートピア」、「知恵の持ち主のラマ僧の国」、そして「世界に希望を与える存在」とみなされていたが、19 世紀から英米に救われる側と位置づけられていた。こうした言説を踏まえて、21 世紀のアメリカン・アポカリプスで再想像されたチベットを検討すると、共通点と相違点を確認できる。『ゼロ K』と 2 本の映画においてチベットがアポカリプスと無縁のユートピアとして、また人類にとって精神的かつ物質的な救済として表象されているのは、20 世紀の英米の想像の影響を受けているからだ。一方、21 世紀のアメリカン・アポカリプスにおけるチベット像を特徴づけるのは、チベットが救われる側でなく、英米を含む全世界を救う役として描かれているということだ。

### 2. アポカリプス的な世の中で、平和を保つ：『ゼロ K』におけるチベット像

この節では、まずドン・デリーロの『ゼロ K』におけるチベット表象を振り返る。その後、

現代におけるアポカリプスの定義とこの小説におけるアポカリプス表象を確認する。『ゼロK』では、アメリカ出身の富豪のロス（Ross）が、妻アーティス（Artis）の末期の病気に気づき、冷凍保存によって二人とも不死になることを追求するために、コンバージェンスという人体冷凍保存施設を訪れる。本稿で注目したいのは、コンバージェンスで臨終サービスを務める修道士（Monk）という人物がチベットに巡礼するということだ。この抜粋が示すように、修道士はチベット仏教の聖地のヒマラヤ山脈を訪問し、五体投地で巡礼したことを回想している。

> “I [the Monk] decided to make a journey to the sacred mountain in the Tibetan Himalayas. A great white icy pyramid. […] Masses of people arriving at the base of the mountain. People crowded into open trucks with bundled possessions hanging from the sides and people tumbling out and milling about and looking up. There’s the summit washed in ice and snow. The center of the universe. People with yaks to carry supplies and tents. Tents pitched everywhere. Prayer flags draped everywhere. Men with prayer wheels, men in woolen face masks and old ponchos. All of us here to make the circumambulation of the high rim at five thousand meters. I was determined to follow the trail in the most demanding manner. Take one step and then fall to the ground in body-length prostration. Rise to my feet, take one step, then fall to the ground in body-length prostration. It would take days and then weeks, they told me, for someone not raised and trained in the age-old practice. Thousands of pilgrims every year for two thousand years, walking and crawling beneath the summit. […]” (DeLillo 87, ブラケット付きの省略 […] は引用者)

ヒマラヤ山脈を飾るチベット祈りの旗やマニ車を回す巡礼者の姿が修道士にとって印象深いようだ。修道士自身もチベット人のように、厳しい寒さに負けずに五体投地でヒマラヤ山脈を歩き回りながら瞑想する。この場面で描かれているのは、コルラという、聖地（例えばヒマラヤ山脈）の周りを回ることで成し遂げられるチベット仏教の巡礼の一種だ。大きな功徳を積むための手段としては、五体投地を繰り返すことによるコルラが挙げられる。修道士に目撃されるように、マニ車を回しつつ、マントラを唱えつつコルラする実践者が多い。前述のとおり、この小説におけるチベット表象についての議論は滅多に無い。私の知る限りでは、渡邉克昭（2017）は、デリーロの他の小説におけるアジア表象と関連させて修道士のチベット巡礼を概説的に論じており、Jie Yuan は仏教の四諦（つまり苦諦・集諦・滅諦・道諦）を用いてこの小説とデリーロの他の作品における仏教表象を分析している。ここで指摘したいのは、先行研究がチベットとアポカリプスの繋がりには注目していないということだ。具体的な説明に入る前に、現代におけるアポカリプスの定義を振り返ってみよう。よく知られているように、キリスト教における『ヨハネの黙示録』がアポカリプスのプロトタイプだが、現代に入って、「アポカリプス」という言葉は宗教的な意味合いが薄れ、より世俗的で文化的な想像に取って代わられ、善悪の戦いと重要視されているもの

の破壊が強調され、「災害」や「大惨事」とほぼ同義に見られるようになった（Newsom x-xi）。再定義されたアポカリプス的想像は、気候、インフラ、社会的な繋がりといった、文明を構成する基盤の破壊に焦点を当てており、崩壊を引き起こす悪側は外的要因（宇宙人や他の惑星から訪れる者）と内的要因（テクノロジーの制御の喪失や人間の欲望の暴走）が挙げられる（ibid. xii）。最後に、もう 1 つ重要な要素は、少数の人が生き延びるという希望だ（ibid.）。上述の内容を踏まえて、本稿では、再定義された現代のアポカリプスの意味に従って「災害」や「惨事」 を「アポカリプス」と呼ぶ。

『ゼロ K』におけるアポカリプス表象はコンバージェンスの廊下のスクリーンに上映されるビデオだ。具体的に言うと、洪水と台風による被害、焼身自殺した三人組、そして戦争の光景、この 3 つだ。次の引用は洪水と台風による被害だ。

> At first the images were all water. There was water racing through woodlands and surging over riverbanks. There were scenes of rain beating on terraced fields, long moments of nothing but rain, then people everywhere running, others helpless in small boats bouncing over rapids. There were temples flooded, homes pitching down hillsides. I [ジェフリー（Jeffrey）、コンバージェンスを訪れるロスの息子] watched as water kept rising in city streets, cars and drivers going under. The size of the screen lifted the effect out of the category of TV news. Everything loomed, scenes lasted long past the usual broadcast breath. It was there in front of me, on my level, immediate and real, a woman sitting life-sized on a lopsided chair in a house collapsed in mudslide. A man, a face, underwater, staring out at me. I had to step back but also had to keep looking. It was hard not to look. (DeLillo 11)

至る所で人々が逃げようとしており、ボートに乗った人も不安そうに見える。洪水で家や寺院、町全体が浸水し、強い流れのために車やバスが転覆してしまう。土砂崩れで倒壊した家や溺死した男の姿も恐ろしい。また、死者が出るほどの激しい台風が上陸し、建物を倒壊するのも描かれている（ibid. 36-37）。次は焼身自殺した三人組の映像の描写だ。

> There were three men seated cross-legged on mats with nothing but sky behind them. They wore loose-fitting garments, unmatched, and sat with heads bowed, two of them, the other looking straight ahead. Each man held a container at his side, a squat bottle or can. Two of them had candles in simple holders within reach. After a moment they began, in sequence, left to right, seemingly unplanned, to take up the bottles and pour the liquid on chest, arms and legs. Then two of them, eyes closed, advanced to head and face, pouring slowly. The third man, in the middle, put the bottle to his mouth and drank. I watched his face contort, mouth opening reflexively to allow the fumes to escape. Kerosene or gasoline or lamp oil. He emptied the remaining contents on his head and set the bottle down. They all set the bottles down. The first two men held the lighted candles to their shirtfronts

and trouser legs and the third man took a book of matches from his breast pocket and finally, after several failed attempts, managed to strike a flame. (ibid. 61-62)

三人の男が敷物に座ってガソリンを飲み始める。そしてガソリンを体に注いで、引火して自殺を試みている。最後に、戦争の光景も描かれている（ibid. 259-62）。損傷した車の中に押しつぶされた兵士の死体、民衆に閃光手榴弾を投げる機動隊、虐殺された人々の間に飛び回るハゲワシなどのイメージが印象的だ。こうした残酷な戦場の中で、マシンガンを持って仲間の犠牲を悼む戦士や子どもたちがいる。周りは爆弾が爆発する音や戦闘機が空を飛ぶ音が響いており、燃えている町や倒壊した建物が見られる。

このようなアポカリプスと対照的なのは前述した修道士のチベットでの平和な巡礼生活だ。『ゼロ K』では、チベットの外の世界がアポカリプス的な状況に陥るのに、チベットは平和であると描写されている点が特筆に値する。実際、21 世紀のハリウッドによる SF 災害映画には、チベットと世界の他の地域を同じように描いたものが 2 つある。『2012』（2009 年）と『ザ・クリエイター/創造者』（2023 年）だ。前者に関する先行研究は希少だが、後者に関する先行研究としてはキリスト教表象（Laura Copier and Caroline Vander Stichele）、『2012』と他のパニック映画の比較分析（Marc DiPaolo）、マヤ暦における 2012 年人類滅亡説・地球の変化・陰謀のコラージュ（Joseph P. Laycock）、グローバルガバナンスという概念の非効率性（Neil Archer）、災害・仮想性・地震学・疑似科学の関連性（Axel Andersson）、映画の用いた特殊効果（Peter Szendy）が挙げられる。とはいえ、『2012』が描くチベット表象を中心にした分析はない。そこで、本稿では、『ゼロ K』、『2012』、『ザ・クリエイター/創造者』といった、アメリカの作家や監督による災害をテーマにした小説や映画を「アメリカン・アポカリプス」と呼び、これら 3 作品におけるチベット表象に焦点を当てる。

## 3. 『ゼロ K』、『2012』、『ザ・クリエイター/創造者』の共通点

映画愛好家として知られるデリーロの『ゼロ K』におけるアポカリプスの描写はこの 2 本の災害映画と共通点がある。『ゼロ K』と『2012』の類似点は、洪水災害に対する描写、ノアの方舟を想起させるストーリー、そしてサバイバルが富豪層の特権であることが挙げられる。『ゼロ K』における洪水表象は前節で述べたとおりだが、『2012』は地殻変動による大洪水を描いている。また、こうした洪水の物語はキリスト教における『創世記』と関連しており、人類のサバイバルに関わるノアの方舟のストーリーを想起させる。『ゼロ K』においてコンバージェンスの投資者がアポカリプスの中で人体冷凍保存に不死と蘇生への希望を託すという設定について、批評家デイヴィド・カワード（David Coward）は、“the Ark of the Convergence”と指摘している（151）。『2012』においては人類を洪水から救うためにハイテク船を建造する計画が「ノアの方舟」と名づけている。そして生き残られるか否かは階級と関わっているというのも両作品の共通の特徴だ。『ゼロ K』であれ『2012』であれ、アポカリプスから脱出し、命脈を保たれるのは富豪層のみだ。そのため、前者には次の文が

ある：“Life everlasting belongs to those of breathtaking wealth”（DeLillo 76）。後者に関して研究者は“Magic Lifeboats for the Wealthy”と述べている（DiPaolo 109）。

『ザ・クリエイター/創造者』を射程に入れ、この 3 作品の共通点について論じたい。まずアポカリプス的な破局が想像されていることだ。前述したように、『ゼロ K』では洪水や台風などの自然災害と戦争が、『2012』では地殻変動による大洪水が、そして『ザ・クリエイター/創造者』では制御不能な人工知能による戦争が描かれている。これらのアポカリプスのもう 1 つ共通の特徴は、チベットが唯一の平和な存在として想像されていることだ。『ゼロ K』では修道士が巡礼するヒマラヤ山脈は対照的に平和な場所として、『2012』ではチベット高原は地震や洪水による被害を受けない唯一の場所として、『ザ・クリエイター/創造者』ではチベットは人類と人工知能が平和に共存しており、抜群の技術を持つ唯一の場所として表象されている。最後に、これらのアメリカン・アポカリプスにおけるチベットは精神的にも物質的にも人類を救済する役割を負っていることも注目に値する。『ゼロ K』では、修道士がチベット巡礼で心の平和を見つける。『2012』では、人類を救出するための「ノアの箱舟」の建造地と搭乗地がチベットに設定されている。そして『ザ・クリエイター/創造者』では、主人公ジョシュア（Joshua）が戦争を終わらせる人工知能の少女アルフィー（Alphie）を治療のためチベットへ連れて行く。

こうした表象は、幾つかの疑問を提起する：①なぜアポカリプスを扱った 21 世紀のアメリカ文学や映画では、アポカリプスはチベットと関連付けられなければならないのか。②なぜアポカリプス的な世界において、チベットは特別で平和な地域として描写されなければならないのか。③なぜアポカリプスに陥った人類を救うのはチベットでなければならないのか。これらの疑問に答えるには、21 世紀以前の英米におけるチベット像の特徴を理解する必要がある。次の節から、チベット学者のピーター・ビショップ（Peter Bishop）とドナルド・S・ロペス・ジュニア（Donald S. Lopez Jr）による研究を引用しながら、19 世紀から 20 世紀にかけて変容したイギリスとアメリカにおけるチベット像を説明する。

## 4. 19 世紀と 20 世紀の英米におけるチベット像

21 世紀以前の英米におけるチベットのイメージは 19 世紀から 20 世紀の間に 5 つの変化を経験した：「人里離れた聖地から戦争と無縁のユートピアへ」、「圧政から知恵の持ち主のラマ僧の国へ」、「中国による併合がもたらす危機」、「著しい善悪の二項対立の使用」と「グローバル的位置づけ、希望を与える存在」。19 世紀、イギリス人はチベットを遠く離れた聖地とみなしていたが、20 世紀には、チベットを戦争のないユートピアとして想像するようになった。その原因は 19 世紀からチベットは地理的にも政治的にもアクセスが不能の陸として想像されてきたからだ（Bishop 125）。ヒマラヤ山脈やチベット高原といった地理的な障壁があり、また外国勢力を警戒するために鎖国状態にあったチベットは“no-man’s land”と呼ばれていた（ibid. 215）。しかし、ビショップが他の所で指摘するように、チベットは世界の他の国とは全然交際していなかった、完全な閉鎖的状態にあったため、第一次世界

大戦と無縁であった、などの説は事実ではなく、イギリス人の想像に過ぎない。一例を挙げると、ダライ・ラマが率いたチベット政府は第一次世界大戦に兵士を派遣し、戦後はイギリス政府に祝電を送ったことがある。それにもかかわらずヴィクトリア朝におけるロマン主義の影響が大きかったため、19 世紀のイギリス人にとって、チベットは光と闇を持つ聖地だった（ibid. 2）。こうした想像では、チベットは産業革命によってもたらされた近代化による社会的問題から解放されていたが（ibid. 175）、正反対のものが混在していた。チベット仏教は、光の側面では理性的な特性を持つものと考えられていたが、暗い面では、悪魔を崇拝する傾向があるものと考えられていた。一方、20 世紀になると、イギリスはチベットのネガティブな側面を避け、ポジティブな側面だけを描くようになり、その結果、チベットは戦争のないユートピアとして見られるようになった。なかでも、ジェームズ・ヒルトン（James Hilton）による『失われた地平線』（*Lost Horizon*, 1933）におけるシャグリラは新しいチベット像のプロトタイプだ（ibid. 218）。チベットに基づいて虚構されたシャングリラでは、外の世界が戦争、革命、秩序の崩壊により混乱している一方で、安定と平和が広がっている。このように、シャングリラは、闇の時代における救命ボートであり、グローバル的崩壊から人類文明を守られる唯一無二の存在として描かれている。

それだけでなく、20 世紀において、チベットは地球上の他の国とは異なり、19 世紀末の第二次産業革命によるあらゆる社会問題や二度の世界大戦の被害を受けていないと思われており、乱れた世界の平穏な中心として想像されていた（Bishop 206-07）。二度の世界大戦後、自らの文明への信頼を失った英米人は、チベットを西洋に失われた幸福と知恵の地として、ヒマラヤ山脈を精神的な純粋さの象徴として想像するようになった。言い換えると、20 世紀の英米の目から見れば、チベットは“an atemporal civilization, isolated and above the world”（Lopez 1995: 284）：世界から離れた、崇高な精神の持ち主だった。しかし、ビショップが批判するように、チベットが戦争と無縁のユートピアであるというのも、英米人の幻想に過ぎない。なぜなら、チベットでは二度の世界大戦は起こらなかったというのは事実だが、この地域は歴史的にイギリスのチベット侵攻や中国によるチベット併合など多くの戦争を経験してきたから。

次に、19 世紀から 20 世紀にかけて、英米におけるチベット像の変容のもう 1 つ特徴である「圧政から知恵の持ち主のラマ僧の国へ」について説明する。19 世紀、イギリス人とアメリカ人はチベット仏教を嫌悪し、そのラマ僧を恐れていた。それは、その迷信やラマ僧の専制的な権力といった特徴が、産業革命期のヴィクトリア朝の価値観と矛盾していたからだ（Bishop 127）。チベットの首都のラサは“the Rome of Asia”と呼ばれ、“the dictatorial centre of a police state”とみなされていた（ibid. 168）。また 19 世紀の英米人の大勢はチベットの支配体制に否定的な印象を持っており、ラマ僧を民衆を操る存在と認識していた（ibid. 128）。ところが、20 世紀には、東洋の宗教に対する英米人の関心の高まりと（ibid. 11）、第一次世界大戦後に自らの文明に幻滅した西洋における知恵、指導、秩序の要求が相まって（ibid. 182）、チベットは賢明なラマ僧の土地として再認識された。こうした背景から、チベット

は、チベット人全員が神秘的な知恵を持つチベット仏教徒である模範的な土地として崇拝されるようになった。さらに、英米のチベットへの憧れはヒマラヤ山脈と結びつけられている（ibid. 236）。例えば、アメリカ作家のピーター・マシーセン（Peter Matthiesson）にとって、ヒマラヤは、純粋な洞察力の崇高な感情と関連しており、精神的な知恵と知識の頂点を表している。ヒマラヤ山脈とラマ僧のイメージが重なり合うことで、チベットは西洋人の認識を超えた知識の故郷として再認識されるようになった（ibid. 237-38）。換言すれば、20 世紀の英米の観点からみると、チベットは、“a land of childlike innocence”から“a land of supreme wisdom”へ（ibid. 238）、また“an idyllic agrarian society”から“a land of lamas, endowed with ancient, sometimes secret, wisdom and ruled benevolently by a buddha”へと（Lopez 1995: 284）変身した。

「中国による併合がもたらす危機」は 20 世紀英米におけるチベット像のもう 1 つの特徴だ。20 世紀の英米の言説では、1950 年代のチベット併合は幸福なチベットの崩壊とアポカリプス的な世界への転落をもたらしたとされている。マリリン・M. リー（Marilyn M. Rhie）とロバート・A・F・サーマン（Robert A. F. Thurman）が指摘するように、何百年もの間、チベットは無秩序な世界から隔離された平和で幸福な国であると考えられていたが（quoted in Lopez 1998, 203）、併合後、亡国する危機に瀕した国になった（Lopez 1995: 284, 268）。当時の英米の一般的な見解は、社会主義的変革を推進しようとした中華人民共和国の支配下に入ると、チベットの民族と文化は終焉を迎えるというものだった。

これらの言説に見られるのは、19 世紀以来存在してきた善と悪の二分法の使用だ。一言で説明すると、19 世紀以来、英米は自らをチベットの味方とみなし、チベットを救う善の側に自らを位置づけ、独裁的なラマ僧と中国を悪の側に位置づけてきた。ここで注目すべきは、19 世紀であれ 20 世紀であれ、チベットは常に救済されるべきものとして位置づけられてきたことだ。19 世紀、イギリスは世界的、帝国的、進歩的というアイデンティティを確立し、新たなローマ帝国として世界に平和、繁栄、文明をもたらそうとしたが、一方でチベットは前述の通り、閉鎖的で専制主義的、保守的な国とみなされていた（Bishop 128）。そこでイギリスでは、憎むべきラマ僧たちの搾取的で暴君的な支配からチベットの人々を解放するのは先進国としてのイギリスの義務であるという考えが具体化し始めた（ibid. 129）。20 世紀には、前述のように、アメリカは中国によるチベット併合がチベットにとって大きな危機であると考え、アメリカ人、特にチベット研究を専攻する大学院生をチベット文化の唯一の継承者とみなした（Lopez 1995: 268）。アメリカでは、チベットの若者はチベットの伝統を継承することに興味も能力もないので、チベット文化を継承するのに“inadequate caretakers”であるという考えが広く信じられていた（ibid. 269）。この善と悪の二元論の中で、チベットは解放と救済を必要とする国として位置づけられていることは明らかだ。

最後に、19 世紀以来、チベットは英米を含む全世界にとっての希望の源と見なされてきたことを説明する。19 世紀のイギリスでは、チベットの旅行記では「地球最後の場所」や

「世界で最も高い国」などの表現が使われ、チベットが世界的な文脈の中で位置づけられることが常にあった（Bishop 178）。イギリスの旅行者にとって、首都のラサとダライ・ラマが率いるチベット政権の政治的、宗教的権威を象徴するポタラ宮殿は、チベット人やモンゴル人だけでなく、全世界にとっての聖地だった（ibid.）。その原因の 1 つは、1865 年以降、中期ヴィクトリア朝時代のイギリス文明に対する信頼が崩壊し、その結果、19 世紀末にイギリスは疑念と不安の時代に突入したことだ（ibid. 101）。特に第一次世界大戦後、チベットは文明と人類の存続と結び付けられ、地球規模の大惨事を生き延びて未来の文明の種子となり得る“the jewel in the lotus”として想像された（ibid.）。そして残酷な第二次世界大戦の後、冷戦が始まり、特に核兵器の分野で軍拡競争が起こり、幻滅感が広がるにつれて、英米の人々は再びチベットに注目するようになった。この時期の英米の言説では、チベット人は依然として、世界から隔離され、戦争の影響を受けていないユートピアであり、西洋にとっての希望の源であると考えられていた（ibid. 211-12）。さらに、チベット仏教も大きな影響を与えた。20 世紀、英米は知恵、導き、秩序を切望し、ダライ・ラマと仏教の経典『バルド・トゥ・ドル』（チベット死者の書）に代表されるチベットは全世界に希望を与えると信じられていた（ibid. 239）。端的に言えば、19 世紀以来、一連の地球規模のアポカリプス的出来事を目撃してきた英米は、チベットとチベット文化が地球と人類の存続に重要な役割を果たすと信じていた。

## 5. 21 世紀のアメリカン・アポカリプスに再想像されたチベット

上述した 20 世紀の英米におけるチベット像の特徴を踏まえて、21 世紀のアメリカン・アポカリプスで再想像されたチベット表象を分析してみたい。20 世紀には、チベットはアポカリプスの一種である世界大戦の影響を受けていないユートピアとしてみられていたが、21 世紀には、戦争だけでなく、天災をも含めたアポカリプスと無縁のユートピアとして想像されている。『ゼロ K』では、天災や戦争が世界中で起こっているが、ヒマラヤ山脈とチベットのみが平和を保っているところとして描写されている。『2012』では、地殻変動による洪水が世界中の人々の生命を奪っているが、チベット高原はいまだに安全な場所として表象されている。『ザ・クリエイター/創造者』では、人工知能のロボットと人類の戦争が世界を破壊しているが、チベットだけが人類と人工知能が平和に暮らしている地域として描かれている。また、20 世紀に知恵の持ち主のラマ僧の国とみなされていたチベットは、依然としてチベット仏教徒が遍在する知恵の国として表象されている。『ゼロ K』では、修道士が精神的な成長を達成するためにヒマラヤ山脈に巡礼し、チベット仏教の「空」という思想を知るようになった。『2012』では、チベット人が高度な技術を要する「ノアの箱舟」を建造する者として描かれている。『ザ・クリエイター/創造者』に描かれたチベットには、至る所にチベット仏教徒がおり、彼らだけが、人間と人工知能の平和を維持する秘密と、アメリカよりも優れた技術を握っている。そして本稿で明らかにした、21 世紀のアメリカン・アポカリプスで再想像されたチベット表象のもう 1 つの特徴は、救う側と救われる側

が 20 世紀のとは正反対であることだ。チベットは 19 世紀から英米に救済される側に位置づけられてきたが、21 世紀には世界全体を救出する側に位置づけられている。『ゼロ K』では、修道士がチベットを訪れ、仏教の五体投地で巡礼することで心の平和を見つける。『2012』では、世界中の人々がチベットでノアの箱舟に搭乗し、命を守る。『ザ・クリエイター/創造者』では、人工知能の少女アルフィーと主人公の妻マヤ（Maya）がチベットで治療を受けながら、グローバルな人工知能との戦争を終わらせる道を見つけようとする。こうしたエピソードは、チベットが依然として「全世界に希望を与える存在」とみなされていることを示している。

※本稿は、2024 年度日本アメリカ文学会関西支部若手シンポジウム「現代アメリカ文学における「ポスト（以後）」」（オンライン開催、2025 年 1 月 11 日）で発表した内容に加筆したものである。また本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2138 の支援を受けたものである。

## 引用文献

Andersson, Axel. “The Virtual of Disaster: Science, Politics and Tectonics in Roland Emmerich’s *2012*.” *Film on The Faultline*, edited by Alan Wright, Intellect Ltd., 2015, pp. 93-108.

Archer, Neil. “Transnational Science Fiction at the End of the World,” *Journal of Cinema and Media Studies*, vol. 58, no. 3, 2019, pp. 1-25.

Ashman, Nathan. “Death Itself Shall Be Deathless”: Transrationalism and Eternal Death in Don DeLillo’s *Zero K*,” *Critique: Studies in Contemporary Fiction*, vol. 60, no. 3, 2019, pp. 300-10.

Bishop, Peter. *The Myth of Shangri-La: Tibet, Travel Writing and the Western Creation of Sacred Landscape*. The Athlone Press, 1989.

Cofer, Erik. “Owning the End of the World: *Zero K* and DeLillo’s Post-Postmodern Mutation,” *Critique: Studies in Contemporary Fiction*, 59:4, 2018, 459-70.

Copier, Laura, and Caroline Vander Stichele. “Death and Disaster: *2012* Meets *Noah*.” *Close Encounters Between Bible and Film: An Interdisciplinary Engagement*, edited by Laura Copier and Caroline Vander Stichele. SBL Press, 2016, pp. 155-71.

Coward, David. “Don DeLillo’s *Zero K* and the Dream of Cryonic Election.” *Don DeLillo: Contemporary Critical Perspectives*, edited by Katherine Da Cunha Lewin and Kiron Ward. Bloomsbury Academic, 2019, pp. 143-57.

DeLillo, Don. *Zero K*. 2016. Scribner, 2017.

DiPaolo, Marc. “Noah’s Ark Revisited: *2012* and Magic Lifeboats for the Wealthy.” *Fire and Snow: Climate Fiction from the Inklings to Game of Thrones*. SUNY Press, 2018, pp. 109-26.

Laycock, Joseph P. “Space Brothers and Mayan Calendars: Making Sense of ‘Doomsday Cults’.” Schedtler and Murphy, pp. 441-67.

Lopez Jr., Donald S. “Foreigner at the Lama’s Feet.” *Curators of the Buddha: The Study of Buddhism under Colonialism*, edited by Donald S. Lopez Jr. U of Chicago P, 1995, pp. 251-95.

---. *Prisoners of Shangri-La: Tibetan Buddhism and the West*. 1998. U of Chicago P, 2018.

Newsom, Carol A. Foreword. Schedtler and Murphy, pp. ix-xv.

Schedtler, Jeffcoat and Kelly J. Murphy, editors. *Apocalypses in Context: Apocalyptic Current through History*. Fortress Press, 2016.

Szendy, Peter. “2012, or Pyrotechnics.” *Apocalypse-Cinema: 2012 and Other Ends of the World*, by Peter Szendy, translated by Will Bishop. Fordham UP, 2015, pp. 31-40.

*The Creator*. Directed by Gareth Edwards, performance by John David Washington, et al., 20th Century Studios, 2023.

Yuan, Jie. “‘Writing as Enlightenment’: Don DeLillo’s Buddhism and Postsecular Writing,” *Neohelicon*, vol. 48, 2021, pp. 367-385.

*2012*. Directed by Roland Emmerich, performance by John Cusack, et al., Sony Pictures Releasing, 2009.

渡邉克昭「囁き続ける水滴—ドン・デリーロの『ゼロ K』における「生命の保守」」『揺れ動く〈保守〉—現代アメリカ文学と社会』春風社、2018 年、276-307 頁。

———「ドン・デリーロにおける死のデザイン—オリエンタルな意匠をめぐって」AALA Journal アジア系アメリカ文学研究会、2017 年、第 22 号、29-55 頁。

———「ドン・デリーロの惑星的想像力の場としての“Convergence” ——『ゼロ K』における「ポストヒューマン・ボディー」とアース・アート」『エコクリティシズム・レヴュー』エコクリティシズム研究学会、2018 年、第 11 号、1-13 頁。